



Title	<海外デザイン研究誌紹介>Design Studies
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 121-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Design Studies

The international journal for design research in engineering, architecture, products and systems.

本誌は、Sydney Gregoryを編集責任者とし、デザイン研究学会 (Design Research Society) の協力のもと、連合王国のIPC Science and Technology Press社より、1979年7月に創刊されている。現在は、出版社がButterworth-Heinemann社に変わり、編集責任者はNigel Crossである。他に、4人の共編者と内外から選ばれた10人あまりで編集委員会が構成されていることは創刊当時と変わりはない。その構成員の専門は、建築、経営科学、デザイン、工学など、多岐にわたっている。

創刊にあたって、S. Gregoryは本誌の意義について、国境を越え、それぞれの専門の枠を越えて「デザイン」についてのアイデアと知識を交換する場をつくり、あらゆる可能性を切り開くことにあると述べている。したがって、「デザイン」をあまり厳密に定義し過ぎることを避け、排他的になるよりも総括的に捉えようとする。デザインを一人一人の人間が自分を取り巻く環境、あるいは、さまざまな困難や変化に対処するために、適応しようとする手続きであり手段であるという、最も一般的な次元で捉えようとする。デザインは行動のための計画である。そして、すべての人々にとっての技術であり活動であるとする。

デザインに関する知識、方法、価値観、その効果などがますます多様になり、かつ複合的になりつつあるとき、デザイナー、デザイン管理者、デザイン教育者、研究者、

その他の人たちが一同に会し、共通の基盤にたつてデザインの本質、その効果、社会における役割などについて、領域の内と外から議論を展開する。そして、その複雑さを解明し、この分野のさらなる発展を期するというのが、デザイン研究学会そのものの目的であり、本誌発刊の趣旨でもある。

本誌は季刊誌であり、各号平均6~7篇の論文が掲載されている。工学設計、工業意匠、建築、デザイン理論に関連する研究論文が対象にされている。言うまでもなく論文はすべて査読を受けたものである。

最近6年間に発刊されたものだけを見ても、執筆者の国籍は20あまりにおよび、当初の計画どおり世界的である。そのほとんどは大学およびその研究機関に所属している。企業に所属している者は2、3を数えるに過ぎない。その専門分野としては、デザインは勿論のこと、機械工学、建築関係が比較的目的だが、認知科学や教育学、情報工学、計算機科学なども含まれている。執筆者の国籍で、目だつて多いのはアメリカ合衆国、連合王国であるが、次いでオーストラリア、オランダが続いている。旧ソ連やサウジ・アラビア、中華人民共和国、イスラエルなど、われわれにとっては比較的馴染みの少ない国の研究者の論文もある。

論文の内容については、一つ一つを取り上げて紹介する余裕はないが、創刊号ならびに最近6年間に掲載された論文152編 (本年最終分 Vol. 14, No. 4 は含まない)

について、出現頻度の高いキーワードを抽出すると以下ようになる。

CAD (computer-aided design), design process, methodology, design method, design education, engineering design, architectural design などである。これらに次ぐものとしては、design knowledge, design theory, public participation, model, creativity, artificial intelligence。さらには、problemsolving, software design, protocol analysis, product design, mechanical design, conceptual design, design management などが上げられる。

頻度高く現れるキーワードからも容易に推察されるように、デザイン過程へのコンピュータの援用に言及するものが多く、CAD についての研究は、いまだに盛んである。しかしながら、CG や drafting に関するものは少ない。その関心は、デザインあるいはデザイン活動についての理論的、論理的な考察にある。その結果、すべてが論理的に処理できるものでないことも明らかになってくる。あるいは、デザイン過程にコンピュータを使うことに伴う問題点の解明、指摘にも及ぶ。そのようなことから、あらためてデザインの過程、その方法、ならびに、理論、知識のあらたな構築へ向けての研究が多くなっている。デザインのための人工知能や知識データ・ベースの開発と平行あるいは表裏をなす形で、何がデザインの情報となり得るか、デザインの問題とは何かについての考察、あるいはまた、デザインにおける創造性やデザイナーの思考・行動、その認知科学的な考察についての研究が多くなっているのは興味深いこと

である。

コンピュータおよびそのソフトウェアがかなりのところまで発達した今日、それをデザイン過程の定型的な作業に援用するだけでなく、デザイン活動の本質的なところでコンピュータを活用することに向けて、デザイン問題の提起や人間の思考や行動の仕方の考察、研究に焦点が移りつつあるように思える。

デザイン過程のプロトコル分析は、デザイナーの創造的な活動のあり方を究明しようとすると同時に、デザイン教育のための指針を探ろうとするものでもある。本誌に掲載されている論文のうち、デザイン教育に言及しているものが多いのは、執筆者の多くが教育関係者であることを反映していることもあるが、デザイン教育のなかでコンピュータを援用しようとするとき、その創造的な側面をいかに扱うかが重要な課題であることを示唆しているとも言える。

既存の専門領域の枠を越えて「デザイン」を捉え直そうとして発刊された本誌は、コンピュータ技術の発達の後にくる今日の状況を当初から見越していたと言える。多種多様な情報を大量に処理することが可能になったいま、デザインはより拡大した視野において捉えられるべき段階にきている。それは、デザインを希薄なものにするのではなく、それをより深め、充実したものにするためのものでなければならない。

増山和夫 京都工芸繊維大学